

# イネ縞葉枯病情報第1号

西三河地域のコムギから採取したヒメトビウンカの  
縞葉枯病ウイルス保毒虫率が高まっています！

平成28年5月31日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

## 1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査の結果

尾張、海部、豊田、西三河地域のムギ類から採取したヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査の結果、保毒虫率が平均6.8%となり、過去10年で最も高くなりました。

西三河地域では、保毒虫率が高い地点が見られるため（図1）、防除対策を行う必要があります。

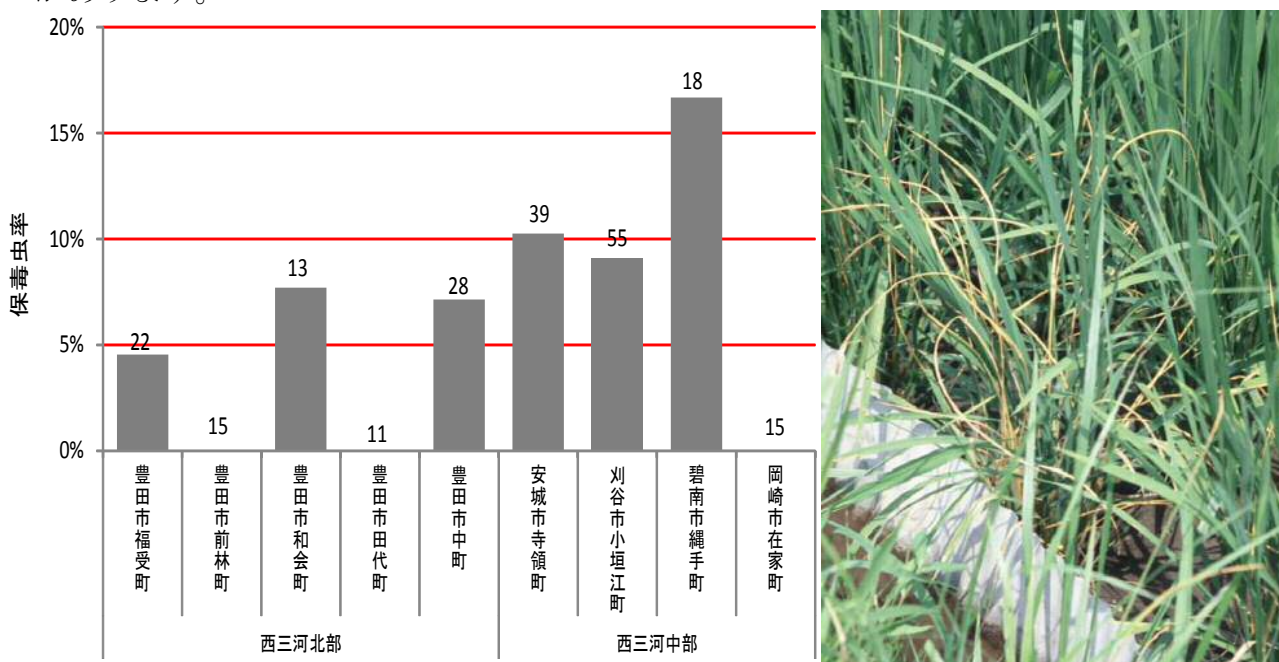


図1 ヒメトビウンカの縞葉枯病ウイルス保毒虫率  
(西三河地域)

グラフ上の数字：検定虫数、検定虫数が10未満は省略



図2 ゆうれい症状

## 2 イネ縞葉枯病について

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、ウイルスを保毒したヒメトビウンカにイネが吸汁されると感染します。

イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します（ゆうれい症状）（図2）。また、穂が出すくんだり、不稔になったりすることにより減収します。

ヒメトビウンカは、幼虫で水田周辺のイネ科雑草等で越冬し、4月上旬頃に成虫になりムギ畑に飛来して一世代経過し、増殖します。6月中旬頃に成虫が水田に飛び込み、このとき、保毒虫がイネにウイルスを感染させます。また、本ウイルスは経卵伝染し、次世代も縞葉枯病を感染させます。

本県で栽培されている「あさひの夢」、「ゆめまつり」、「あいちのかおりSBL」、「大地の風」などは、本病に抵抗性ですが「コシヒカリ」は感受性で、近年発生が増加しています。

### 3 防除対策

抵抗性品種の作付けが少なく、ヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬を実施していない地域や不耕起V溝直播栽培で、殺虫剤の種子塗抹を実施していない地域では、ムギ畑から飛来する成虫を対象に本田防除（6月上旬～中旬頃）を実施しましょう。

表 ヒメトビウンカに対する主な本田防除薬剤

薬剤名	希釈倍数・使用量	収穫前日数	本田での使用回数	備考
スタークル液剤10	1000倍(60～150L/10a)	収穫7日前まで	3回以内	
スタークルメイト液剤10				
スタークル豆つぶ	250～500g/10a	収穫7日前まで	3回以内	
ダントツ水溶剤	4000倍(60～150L/10a)	収穫7日前まで	3回以内	
ダントツ粒剤	3kg/10a	収穫7日前まで	3回以内	
MR. ジョーカーEW	2000倍(60～150L/10a)	収穫14日前まで	2回以内	
トレボンEW	1000倍(60～150L/10a)	収穫21日前まで	3回以内	
トレボンエアー	8倍(0.8L/10a)	収穫14日前まで	3回以内	無人ヘリ用

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。